

『今、目を向けるべきもの』 ヨハネ4:27-38

4:27 そのとき、弟子たちが帰って来て、イエスがひとりの女と話しておられるのを見て不思議に思ったが、しかし、「何を求めておられますか」とも、「何を彼女と話しておられるのですか」とも、尋ねる者はひとりもなかった。

4:28 この女は水がめをそのままそこに置いて町に行き、人々に言った、

4:29 「わたしのしたことを何もかも、言いあてた人がいます。さあ、見にきてごらんください。もしかしたら、この人がキリストかも知れません」。

4:30 人々は町を出て、ぞくぞくとイエスのところへ行った。

4:31 その間に弟子たちはイエスに、「先生、召しあがってください」とすすめた。

4:32 ところが、イエスは言われた、「わたしには、あなたがたの知らない食物がある」。

4:33 そこで、弟子たちが互に言った、「だれかが、何か食べるものを持ってきてさしあげたのであろうか」。

4:34 イエスは彼らに言われた、「わたしの食物というのは、わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである。

4:35 あなたがたは、刈入れ時が来るまでには、まだ四か月あると、言っているではないか。しかし、わたしはあなたがたに言う。目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈入れを待っている。

4:36 刈る者は報酬を受けて、永遠の命に至る実を集めている。まく者も刈る者も、共に喜ぶためである。

4:37 そこで、『ひとりがまき、ひとりが刈る』ということわざが、ほんとうのこととなる。

4:38 わたしは、あなたがたをつかわして、あなたがたがそのために労苦しなかったものを刈りとらせた。ほかの人々が労苦し、あなたがたは、彼らの労苦の実にあずかっているのである」。

●序論

イエスさまの一人のサマリヤの女性との出会いをめぐる物語をずっと見てきています。ただひとりのためです。それがイエスさまのなされたことでした。しかしそのひとりをとおして、そのサマリヤの人々が動き始めた様子が、今日お読みした最初の個所に描かれています。

「ひとりのために」。これはもう10年以上の間、教区のCS教師研修会のメインテーマとして挙げられてきたものです。

多くの教会で、子どもたちがたくさんいる？ところもありますが、少ない…という現実の中で、出会うひとりの子どもの救いのために祈ろう、奉仕しよう…そういう思いが込められているように思います。

子どものありさまは、必ずしもすぐに実となって洗われるかどうか…はわかりません。そのすべてを神さまが導いてくださることを信じて、長い時間をかけて祈ることの大切さです。

その実は、必ずしも自分たちの手、見えるところで起こらないかもしれません。

わたしたちがすべてをコントロールすることはできません。でも神さまにはおできにな

り、その大きな視野と良いご計画のもとに、わたしたちを用い、救いのみわざをしてください。そう信じます。そして宣教のわざを進めます。

4:37 そこで、『ひとりがまき、ひとりが刈る』ということわざが、ほんとうのこととなる。

アーメンです。わたしたちひとりひとりの信仰の歩みが用いられているのです。だから、わたしたちは自分たちの目が見ているものではなくて、神さまが見ておられる、神さまが見、また導いてくださっている霊的視界に目が開かれないと願います。

:35 …しかし、わたしはあなたがたに言う。目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈入れを待っている。

●本論

I. 3つ目の霊的視点へのアプローチ

ニコデモ、そしてサマリヤの女性との対話と、連続して、霊的理解に目を開く対話がなされています。

今日、弟子たちとの対話を通して、彼らの視点、視界に触れておられます。

4:31 その間に弟子たちはイエスに、「先生、召しあがってください」とすすめた。

4:32 ところが、イエスは言われた、「わたしには、あなたがたの知らない食物がある」。

弟子たちの反応とイエスさまのお言葉にそれが現れています。

4:33 そこで、弟子たちが互に言った、「だれかが、何か食べるものを持ってきてさしあげたのであろうか」。

「食物」という話題とやりとり。弟子たちはまだ、肉的な、自分たちの経験の範囲の中の理解にとどまっていた。それに対して…

4:34 イエスは彼らに言われた、「わたしの食物というのは、わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである。

イエスさまは彼らの見ていないもの、見えていない物に目を開くチャレンジを与えています。「わたしの食物というのは…」と、その霊的な食物のありさまと存在を語りだされるのです。

そこに喜びがあり、そこに霊的満足が得られるものがあるのです。

マタイによる福音書で百匹の羊のうち、一匹の羊が迷い出て、それを探し出す羊飼いの記事があります。…見つけた時の喜びをこう語られました。

マタイ18:13 もしそれを見つけたなら、よく聞きなさい、迷わないでいる九十九匹のためよりも、むしろその一匹のために喜ぶであろう。

:14 そのように、これら小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない。

さあ、イエスさまの見ておられる霊的な喜びに目を向けましょう。

II. 目を上げて見るべきもの

4:35 あなたがたは、刈入れ時が来るまでには、まだ四か月あると、言っているではないか。しかし、わたしはあなたがたに言う。目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈入れを待っている。

…霊の目を開けてよく見なさい。人の魂の救い、その刈り取りの時は既に来ている…、そういう語りかけです。

直接的には、この後、サマリヤの人々がやって来てイエスさまを信じるようになる。そのことを示しているでしょう。

それは、弟子たちがまいた種ではなく、直接的にはサマリヤの女性の証し、そしてイエスさまの言葉です。

一方で覚えなければならないことは、「種を蒔かなければ、実りを期待することはできない」ということです。

実は、蒔いた種が実りとして表れるのに、しばしば時間がかかる。しかも自分が蒔いた種を自分で刈り取ることができるわけではないかもしれない。

そういう霊的な事実を、わたしたちは知っておかなければなりません。

そしてもう一つ、今わたしたちが救われたのは、また誰かの救いを見ているのは、その、今自分がまいた種がすぐに実ったと言われるだけのものでもないのです。

数年前に、プロテスタント宣教150周年など祝われていましたが、その150年だけとってみても、どれだけわたしたちの知らない信仰の先輩者たちの種まきがあったか…、それが今のわたしたちの教会をつくりだしているのです。

ハレルヤ！ わたしたちはその祈りと働きの実でもあり、またわたしたちはその実を刈り取る者ともされています。

4:38 わたしは、あなたがたをつかわして、あなたがたがそのために労苦しなかったものを刈りとらせた。ほかの人々が労苦し、あなたがたは、彼らの労苦の実にあずかっているのである」。

すべてを神さまご自身が見ておられ、知っておられ、またそこに置いてくださっていることを、信仰の霊的目を上げてて見る者とされていきたいのです。

Ⅲ. 共に喜ぶために

4:36 刈る者は報酬を受けて、永遠の命に至る実を集めている。まく者も刈る者も、共々に喜ぶためである。

ここまでお話してきて分かるように、蒔いた人が必ずしも刈り取るわけではなく、むしろそうでない場合が多い事実があります。

しかしイエスさまは、「まく者も、刈る者も、ともに喜ぶ」と語るのです。

そう知れが、わたしたちが迎えられる神の御国でのありさまです。

だからイエスさまは、「しかし、わたしはあなたがたに言う。目をあげて畑を見なさい」と言われるのです。

今わたしたちが福音の種を蒔くことができるのは、誰よりも神の御子イエス・キリスト

が、わたしたちのために命をも捨ててくださり、わたしたちを罪の呪いと滅びから救い出してください、福音の事実があるからです。

ただその福音を心から感謝し、それを心から伝える。そこでこそ、この世の標準では測れない喜びがあること、これは信仰によって、そしてその道を歩みぬくことによってしかわからない喜びだと覚えていただきたいのです。

●さいごに

昨日天に召された松尾明洋の証しの原稿を見つけました。

…その証には、わたしの知らない、お父さんのことが記されていました。

そのお父さんが、実は松尾兄の救いへの大きなきっかけとなっていると記されていたのです。

淡路島より神戸の教会まで約3～4時間かけて、船が欠航しない限り、毎週教会に通っているのです。幼い頃より父親を見て育ってきた自分としては、不思議なものを見る思いでした。それも一切神仏を信仰しない父親です。もちろん家にあった仏壇、神棚及びお墓にも一度もお参りしたことが無い父親が、聖書を読んでいるのです。驚くではありませんか。回を重ねるにつれて、とにかく教会に行かなければと、自分で自覚し決心したのが、父親が亡くなってからである。

ある日長女が、父親について話をしてくれた時に、お父さんは亡くなる間際まで家族全員のことをどれだけ心配していたか、ひとりも漏れることなく天国で会えることを楽しみにしているよと、話していたとのこと。

天国は一粒のからし種のようなものである。それはどんな種よりも小さいが、成長すると、野菜の中で一番大きくなり、空の鳥が来てその枝に宿るほどの木になる。自分に信仰の種まきをして下さった姉に、両親に感謝します。

松尾兄は、確かにこの都島の教会で救われて、そして洗礼を受けました。

けれども彼の救いのための種まき、祈りは、お姉さん、そしてお父さん、また神戸の教会を通してなされていたのです。

中でもお父さんの信仰生活とそのありさまが、どれほど松尾兄の心を動かしたか。

そのありさまそのものが信仰の種まきとなったことをわたしたちは見ます。

4:37 そこで、『ひとりがまき、ひとりが刈る』ということわざが、ほんとうのこととなる。

アーメンです。そして天国で再会でその喜びをともにすることができます。

不思議な世界ですよ。最後に申し上げます。この「不思議」で、わたしたちを覆う神さまがいっぱいいます。それが恵みの世界です。そこに神さまとともに喜ぶ世界への招きがあるのです。